
狂おしいほど、君を愛す

一真央

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂おしいほど、君を愛す

【Zコード】

Z6399C

【作者名】

一真央

【あらすじ】

男が一人の女を愛した、ただそれだけの、ことだった。人生最後の恋だった、狂おしいほど、娘を愛した……舟橋敬一は、人生に疲れた40過ぎのエリート医師。ある時、彼は真夜中の病院の屋上で自殺を図る事にする。しかしそこには、不思議な少女の先客がいた。同じく自殺を図ろうとした彼女を止め、話をしたが、もう会う事はないだろうと思っていた。しかし運命のいたずらにより、少女と再び巡り会つ。彼の、義娘として…。最初はとまどいの連続だったがあまりにも似すぎていて、お互いの心を誰よりも理解し合える二人

は、一緒に暮らすうちに次第に惹かれあつていった…

俺と彼女が出会ったのは、夜のビルの屋上だった。

「…こんな時間に何をしているんだ…？」

高いフェンスに腰をかけていた彼女は、無表情で振り向いた。咳くように俺の口から漏れたその言葉は、果たして彼女の耳に届いていたのだろうか。

闇夜の中でも凛と光る彼女の瞳に吸い込まれてしまったかのようだ、俺はしばらく目をそらす事ができなかつた。

恋人と夫婦と愛人、これらのような男と女の関係に、果たして違いはあるのだろうか。

少なくとも、俺にはその答えがわからない。

42年もの間生きてきて、それなりの人並みの経験はつんできたが、一向にわからない。

恋をして、お互に惹かれあつて結ばれるのは、至つて自然で当然の成り行きであり、生物の本能だ。

何の束縛もなく、ただ自由に相手の心を読もうとする。

そうやって、駆け引きのゲームを楽しんでいるかのよつて。
この世で最も贅沢でスリリングなゲームである。

結婚すれば、その男女には様々な法律が付きまとい、
一生を区切られた空間の中で過ごす事になる。

しかし愛とは、紙切れ一枚の成約によつて縛り付けられてよいもの
なのだろうか。

結婚とは、契約だ。
お互いがお互いを自分のものにするため、縛り付けあう。
それを幸せと感じるか、何かとてつもなく重荷になるとるかは、
個人の自由だ。

しかし大抵の人間は、前者のために契約書にサインをする。

三つの例の中で、最も至極だと言えるのは、愛人といつ名の関係だ
るつ。

ただの遊びゲームか、真剣な愛か。

真剣な愛であれば、これほど美しく純粋な愛はないだろう。
全てを捨てても、ただ一人を愛せる幸せを手に入れたその時、
きっと濃厚な愛の形がはつきりと見えてくる。

ざつとこんなような事が、俺の専らの持論だ。

おぼろげながらも恋愛観の概要はつかめているはずだ、

しかし、本能的に理解できるものなら、してみたい。

もう二〇歳だ、今まで散々仕事に全てをかけてきて、気がつけば世間一般が望む「結婚」という普通の幸せというものを手に入れていた。

いや、結婚はしなくてもいい、

だけどせめてもう一度、

人生最後の誰かを愛する気持ちを感じる事ができればいい。

しかし今の俺には、結婚や恋愛には魅力を感じる事ができなくなっていた。

どうでもよくなっていた。

軽く伸びをしてため息をこぼし、再び田線をカルテへと移した。

「舟橋」

湯氣と共に運ばれてくる香ばしい香りの方から声が聞こえた。

「お疲れさん。明日、オペなんだろ？？」

「及川か」

同僚の医師である及川は、手に持つているカッピの一つを俺に渡した。

「ああ、胃がんの手術」

及川は隣のデスクに座つて、カルテを覗き込んだ。

「うわ……」この患者、俺と同じ年だよ……。まだまだ働き盛りだ

顔をしかめる及川の手からカルテを抜き取り、それをファイルにしまった。

「……舟橋……お前、大丈夫か？かなり無理しているように見えるぞ？」

及川は唐突に、俺の顔色を窺いながら尋ねた。

「ああ……大丈夫だ」

「今日はもう帰つて休めよ。明日に備えて…」

「…ああ…」

静かに返事をする俺を気にしながら、及川は部屋を離れた。

再び、しんと静まり返る室内。

窓に反射する自分の顔を見つめた。

眉間にはしわが寄つていて、常に目は虚ろ。

それは自分でもわかつていたし、周りが見ても一目瞭然だった。

「…はあ…」

ため息をいぼしながら、顔を両手で覆つた。

そんな時、「ツンツン」と足音が近づいてきた。

「舟橋」

また呼ばれた。

今度は誰が来たのだろうと、顔を上げた。

「院長…」

そこに立っていたのは、この病院の院長だった。
俺は反射的に立ち上がった。

「舟橋、明日手術に出頭するそつだな」

院長はゆっくりと敬一の「テスク」に近づいてきた。
その声はとても低くて重々しかった。

「そこまで難しい手術ではないのに、大病院の院長自ら激励ですか」
俺はなるべく普通に接しようとしたが、どこか皮肉めいたものがこ
められてしまった。

「ああ……まあ……、舟橋」

「はい」

それに気がつかない振りをする院長は、まっすぐ俺の目を見て、言
葉を発する。

「もうあの手術から1年以上も経つんだ……忘れるとは言わないが、
そろそろしつかりと、今後の人生について考えてもいいんじゃない
のか？」

「何故私だけ、ここに残つていられるのですか……。小野先生は別の
病院へ飛ばされたのに……」

「君は

院長は咳払いをした。

「あれはすべて、小野医師のミスだ。

それに君は、優秀だ。

たつた一度のミスなんかで、君の将来を潰す事はできない

ハハツと笑いながら、院長は最後にこう言った。

「近い将来、この一之瀬総合病院をつこでくれる事を期待している

」

院長が部屋を後にした後、俺は再びため息をこぼした。

「小野先生のせいだけじゃねえよ…」

あれは、まだ、1年前のこと。

しんしんと止むこと無く降る雪の日、俺は、あるひとつの少女と会った。

それは、まだあどけなさが残る、17歳の少女。

彼女の名前は、富本ヒナタ。

「今日からお世話になります、富本です」

深くお辞儀をする彼女は、今日から入院する父親の付き添いでやつてきた。

「私が担当医の小野です。富本さん、一緒に頑張りましょうね
「はい、よろしくお願ひします」

笑顔でそういう彼女と父親は、看護士に案内されて病室へ向かった。

「あの子は…本当にす」「こ子だな…」

「え?」

小野先生は、寄り添つようじて歩く親子を見て言った。

「両親が離婚してからも、いつも無理して働く父親を必死で支えてきたそだ。なのにその父親は…」

「富本さんはどういった病気なんですか?」

「肺がんだ」

小野先生は静かにそつと黙つて、その場を去つた。

その頃俺と小野先生は、まだ外科に配属されていた。

小野先生は俺の5歳上で、俺の尊敬する医者だった。

いつも患者の事を気にかけて、病気だけを気にするだけの医者ばかりの中、患者自身の心のケアにも務めていた。周りからも信頼が厚い人だった。

とても心が優しい人だった。

宮本ヒナタは、高校の帰りに毎日病院へ足を運んでいた。

「お父さん、しっかり食べなきゃダメだよ~」

夕食時、食欲がない父親に向かって、いつもこう言っていた。

「お父さん、大丈夫?」

点滴を刺し続いているせいで変色してしまった腕をさすりながら、心配そうに父親の顔をのぞき込んでいた。

その時の彼女の顔は、驚くほど大人びて見えた。

大部屋の隅のベッドにいるその親子を、俺は自分の担当患者を診察しながら、いつも見つめていた。

「宮本さんががんは…予想以上に転移がひどい…」

検査結果を睨みつけながら、小野先生は呟いた。

「長年の無理がたたつたんだろう…」

「手術の予定日は?」

「右の肺がひどく悪化するから、なんとかしたい。腫にも転移しているな…」

俺の質問は聞こえたはずだ。

「先生!」

「…すまない、患者にとっての一一番いい方法が、まだ見つからないんだ…」

2つある肺のうち、1つを取り除いてしまえば、残りの人生は残り1つに頼つていいくしかない。

それを守り抜かなければならぬ。

しかし宮本さんの場合、右の肺がひどい上に、左にも転移していた。もう放射線治療でもどうにもならないだらう。

「「」とにかくはー!」

まぶしいほどの笑顔だった。

宮本ヒナタ。

「「」とにかくは」

廊下の角で、彼女に会つた。

「今、小野先生に、手術のことを聞いたんです。親戚の人と一緒に」

「頑張つてるね」

「私、小野先生を信頼してゐるんです。父の治療は、本当に難しいと
思つんですね…」

「どうしてそつと思つんだい？」

彼女は子供らしい笑顔で、口を大きく開いて言つた。

「私は…医者になりたいんです。だから高校で、医学概論も学んでい
ます」

「…高木さんは、小野先生がきつとよくしてくれると」

「…はい！」

医者のくせに俺は、あまりにも幼稚な言葉しか彼女に送ることがで
きなかつた。

手術が行われた。

俺が小野先生のこの手術をアシストする事になつた。

正直、今思い返すと、確かに小野先生の様子は普通じゃなかつた。

手術が行われる直前、小野先生の愛娘が交通事故で亡くなつっていた

そうだ。

がんは至る所に転移していた。

検査だけではわからなかつた個所も、いくつかあつた。

手術は失敗に終わった。

手術中に急変して、助ける事ができなかつた。

小野先生は、もぬけの殻のようになつていて、ただその場に立つて
いるだけだつた。

俺がひとりで対処したようなものだつた。

例えどんなに優秀な医師でも、あの大手術にたつたひとりで挑む事
なんてできなかつたと思う。

今でも、もし小野先生がいつも通りだつたなら…と、嫌でも考えて
しまう。

小野先生は、とても優しい人だつた。

だから、心がもろかつたのか。

手術が終わつてオペ室から出たとき、真っ先に駆け寄つてきたのは

宮本ヒナタだつた。

俺が亡くなつた事を告げると、彼女はその場に座り込んでしまつた。
まるで、突然糸を切られた道化人形のよつこ。

泣いてはいなかつた。

次に彼女に会つたのは、宮本さんの葬儀のときだつた。

俺は病院の人間として参列をした。

俺はある時の宮元ヒナタの顔を一生忘れる事ができない。

「あなたたちが殺したんだ…」

小刻みに揺れる肩から、俺は目が離せなかつた。

「私はもう信じない！医者になんかなるもんか！一生許さない…つ
！」

この顔だ。

この顔を忘れる事ができないんだ。

今でも鮮明に思い出す。

涙でぐちゃぐちゃになつた彼女の顔。

あんなに笑顔の耐えない、よく笑う少女だったのに。
ただ医者として、どこか暗い病院という空間の中で、明るく笑う強さを認めていたのに。

奪つてしまつた。

しばらくして、彼女は医療ミスとして裁判にかけようとした。
しかし病院が、彼女の父親の親戚に多額の和解金を渡した。

これで終わつたのだ。

その後の人事異動の季節、小野先生は田舎の小さな病院へとじばされた。
俺は、外科から消化器内科へと転属になつた。

間違つている

自分はきっともう、医者としてここにいてはいけない。
まして手術に出頭してはいけない。
医師である事に疲れた。

俺は別にいい人じやない、でも、それでも医者としてのプライドが

ある。

医師でない自分には、もはや存在価値を感じられないと思った。

宮本ヒナタにあんな顔をさせたのは、この病院だ。
そして俺。

ならいつそのこと、死のうと思つた

これから先も、このような事が起こるかもしれない事が、今更ながらすく怖くなつたから。

前々から考えていた事だ。

決して突然の短絡的な思いからではない。

死のう。

この病院で、死のう。

この病院でなければ意味がない。

もう自分には、失うものなんてないのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6399c/>

狂おしいほど、君を愛す

2010年10月28日07時32分発行